魔法少女リリカルなのは　とある転生物語

ＴＥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは　とある転生物語

【Ｎコード】

Ｎ０１３１ＢＡ

【作者名】

ＴＥ

【あらすじ】

これはとある転生した青年の物語。原作にどのように影響するか・・・・・・・

プロローグ『えっ？転生？』by？？？

ここは……どこだ？

俺はどうしてここにいる？

あたり一面は白い空間で何もない

ん？

そもそも、『俺』は誰なんだ？

「あなたは『中村潤一』という人間です」

ああ……。確かにそんな名前だった気がする

それで、俺の名前を知っている羽の付いたあなたは誰なんだ？

「羽がある時点で誰かわかりませんか？」

うーん……。ハーピィ？

「なんでそこでモンスターの名前が……」

冗談だよ。天使か神様か……いや、女神様なのかな

「ええ。私は裁判の女神『サリエル』ともうします」

それでそのサリエル様が俺に何かよう？つか、女神様ってことはこ

こは天国か？

「いいえ。ここは下界と天国の狭間です。あなたはここにいる理由はわかります？」

そりゃあ死んだからだろ？

「では、その理由は？」

それは……えーっと、思い出せない。それに思い出そうとすると頭が痛くなる

「それはあなたの心が拒絶しているからです。ですからあなたはさっき自分の名前を思い出せなかった。自分の体が具現化されていないと同じように……」

俺の心が拒絶している？それに具現化って……？

あっ、俺の体がない

「あなたの今の状態は白い塊。魂だけの状態です。目を閉じて、リラックスして、自分の体を思い出してください」

リラックス……自分の体を……

あっ、なんだが暖かさを感じる……

「それがあなたの体です。どうですか？死んだ理由を思い出せましたか？」

いや、そこだけが思い出せない。もやもやと霞がかったような……

「そうですか……でしたら」

……どうして急に抱きしめる？

「今からあなたが死んだ光景をあなたに見せます。わかってもどうか気を確かに保って下さい」

ぐっ、いきなり何かの光景が頭に！？

「落ち着いて。気を確かに」

……

「どうですか？思い出せましたか？」

俺は……身投げしたのか……

「はい。あなたは仕事や人間関係のストレスから耐えきれずに……」

……なんで思い出させたんだ

「必要なのです」

何にだよ！？

人の嫌な記憶を思い出させて……一体なにに必要なんだよ！

「あなたがこれから『転生』をするために必要なのです」

『転生』！？
なんで？
「あなたがまた生まれて生きるために必要だからです」
どういうことだ？
「生き物は生死を繰り返します。また生まれたとき、前世と同じ過ちを繰り返さないように天国で学ぶのです」
だったら俺もそうすればいいじゃねえか
「ええ。でも、あなたはこれで１００回目の身投げ……自殺をしているのです」
はい？
「あなたの前世、そのまた前世、さらにその前世。計１００人の前世のあなたが自殺しているのです」
ま、まじで？
「はい。あなたはこれまで天国で何を学んでいたのだろうかと呆れてしまうくらいに異常です。ですから特例としてあなたは『転生』という形で学んでもらおうと思います」
学ぶって一体なにを？
「生きることの素晴らしさと人と人の絆をです」

は、はあ……

「さっそくですが、転生する場所は『魔法少女リリカルなのは』の世界です」

えっ！まさかのアニメ世界に転生！？

「はい。そういうのを学ぶにはアニメが一番かと思いまして。あなたはこの作品を知っていますか？」

まあ、大まかな話ぐらいしか……

「それでは転生しようと思いますが、何か希望はありますか？できる限りの希望は叶えましょう」

んじゃ、原作キャラに絶対に会わないようにしてくれ

「それでは転生する意味がないのでダメです」

ちっ……。なら、原作の記憶を全部消してくれ

「理由は？」

深い理由はないけど、原作を知ってたんじゃ本当の生きることの素晴らしさや絆ってもんがわからねえと思うんだ

俺もいちいち同じことを繰り返すのは嫌だし、前世の記憶がなくてもね

「わかりました。その希望は叶えましょう。他にありますか？」

いや、特には……

「そうなのですか？『チートな力をくれ』とか『イケメンにしてくれ』とかそういう希望はないのですか？」

「それもそうですが、知り合いの神はそういう人が多いと話してましたが」

おいおい。それこそ学ぶことの意味がねえじゃんかよ

知るか。俺は俺だ。他人のことは興味ないし関係ない

「わかりました。それでは転生をしましょう。……ってどうして急に身構えているのです？」

いや、その転生の仕方はどうせ下から穴が空いて落ちるってパターンなんだろ？

「うふふ。それは他の神がしていることであって私はそんなことはしませんよ。あそこにある扉を開けて進んでください」

なんだ。良かった。俺、高所恐怖症だから落ちるあの感覚が大嫌いだからな

「まあ、私もそのオチを一度でも良いからやってみたいと思っていました」

えっ……？地面がないいい！！！？？

「頑張って下さいね！！」

こうして、訳も分からず青年の転生物語が始まる
青年はそこで目的のものを得ることができるのか……

第一話『女神に前世の記憶も消しといてと頼んでおくべきだった』ｂｙ潤一

こんにちは。俺の名前は『上條潤一』。前回、転生することになってしまった悲しい男さ
なんか知らんが名字だけ変わって名前は同じなのは女神の計らいなのだろうか

まあ、どうでもいいか
ちなみに年齢は五才。幼稚園児だ

それなりに生きてきたが前世となんら変わらない

両親は共働きで家にいないし、一人っ子だし、友達もいない

まあ、ぶっちゃけ友達など作る気になれない。理由は俺が前世の記憶を持ってしまっているからだ

俺の前世の年齢は２４歳。いい大人だ
そんな大人が、しかも無愛想で無口で口下手で有名だった俺が幼稚園児と仲良くなれる訳もなく、ずっと一人だった

両親はそんな俺にあまり関与してこなかった。仕事が生きがいのような人たちだ。大人しい子供だと思ってるんだろう

前世の記憶がなければまた何か違うんだろうが……

まあ、今更気にしても仕方ないんだが、そんな俺もひとつの趣味がある

それは今、この手に持っているサッカーボールがそうだ
俺は前世では唯一サッカーが大好きで暇さえあればサッカー観戦をしていた
もちろん、やってもいたが才能がなく、努力もしていなかったからろくに上達もせず、高校で引退した
せめて今回はと思い、始めたのだ。このボールも両親に初めてお願いして買ってもらった
そのボールで練習しようと近くの公園に来たのだが
「……」
一人、ブランコに乗って俯いている女の子がいた。年齢は俺と同じくらいだな
なんかたびたび見えるその顔は悲しそうな表情だ
「まあ、いいか……」
正直どうでもいいし、話しかけたところで俺が慰めることなどできる訳がない
だったら、練習していた方がいいに決まっている
「よっ、ほっ！」
ぐっ、やっぱりリフティングは難しいな。でもまあ、前世では１０回できるかできないかくらいだったのが、今では６０回近くできるようになっているのだから練習はやっぱり必要だよな、うん

「おっと」

リフティングを失敗してしまった。こんなことなら女神にサッカーの才能をくれとか言っておくべきだったか

「……」

「……」

ボールを追いかけるとその先にはブランコに乗っている女の子の目の前にあった

「……」

「……」

俺は無言のままボールを拾うと元の位置へと戻る

そりゃあ、取ってくれって話すこともできたが、面倒だから止めた

そのまま一時間くらい練習して、俺は家に帰った。あの女の子はその少し前くらいには居なかった。家に帰ったのだろう

まあ、どうでもいいか

一週間が経ち同じ時間。俺はまた公園で練習していた
これが俺の日課みたいなものだから良いとしてまたあの女の子がいた
最初は気にしていなかったが一週間も一人ブランコでいれば、誰でも気になるだろう
しかも、見られているような気がするし……。気のせいか
話しかけてみるか？いやでもな……
「あっ……」
しまった。考えごとをしていたせいでリフティングを失敗してしまった
「はい……」
「えっ？」
ボールを取りに行こうとしたらブランコに乗っていた女の子。略してブラ子が俺のボールを持って俺に渡してくる
「……」
「あっ、ちょっ……」
ボールを渡すなりブラ子はさっさと、逃げるように公園から居なくなってしまった。せめてお礼の一言でもと思ったのだが……

まあ、いいか

今日の練習でリフティングが６０から８０までできるようになった

えっ？全然変わってねえだって？

うるせえいやい

第二話『なんつーか、仲良くなるのはほんの些細なきっかけなんだな』ｂｙ潤一

前回の練習からまたさらに一週間
また、俺はリフティングの練習をしていた
えっ？どうしていつもリフティングの練習なのかって？友達が居ないからだ

言ってて悲しくなるからその話は置いといて今日は、ブラ子が来ていない
いつもはしばらくしたらブランコに乗りにくるんだが……

まあ、いいか
俺には関係ない

「おっと……」

どうも考えながらのリフティングができないみたいだ

「……」

「あっ……」

俺の目の前にはブランコに乗った女の子。略してブラ子がいた
そのブラ子の手には俺のボールを持っていた

「はい、どうぞ……」

「あ、うん……」

俺はブラ子からボールを受け取る。受け取ったのを確認するとブラ子はいつもの定位置（ブランコ）へと移動した

「……」

うん。わかってる。俺は今言わなければならない言葉がある
それはたった一言。誰でも知っている言葉だ

「はぁ……」

俺は深いため息を吐いた後、練習を再開した。俺って本当に情けないヤツだ

「まあ、いいか……」

俺はリフティングしながらそう呟くのだった

あれから数日が経って俺はいつも通り練習のため公園に来たのだが
俺は入口で止まっている

「うっ……ぐすっ……」

ブラ子が泣いていた。何で泣いてんだろうか？
どうする、今日は帰るか？
いやいや、別にブラ子が泣いていようがいまいが俺にはまったく関係ない事じゃないか
そう！関係ない！
だから俺は練習する！

「……」

「っ……！」

俺が公園に来たのに気づいたのか涙を両手で必死に拭っている。どうやら俺には泣いているところを見られたくないようだ

「……」

「……」

いつも通り、俺は練習、ブラ子は見学。そう。それはいつも通りなのだが、あんなブラ子の様子を見て集中できる訳もなかった

「はあ……たくっ……」

俺は不自然にならないようにボールをブラ子の方へと蹴った

「！　……♪」

ブラ子がボールを拾うと嬉しそうな表情でこちらに向かってくる。
まるで犬みたいだ

「は、はい。どうぞ……」

「……」

俺が無言で受け取ると、またブランコへと逆戻り

「……」

「♪」

もう一回やってみたら嬉しそうにボールを拾いこちらに向かってくる。あいつは犬か？

「……」

「♪」

ボールをまたブラ子に向かって蹴る。ブラ子が持ってくる

「……」

「♪」

また蹴る。ブラ子が持ってくる

「……」

「♪」

「……」

「♪」

「……」

「♪」

蹴れば持ってくる。蹴れば持ってくる。それの繰り返し

ちょっと楽しくなっている俺がいる。って、遊んでどうすんだよ、俺

「……」

「？」

ボールを受けとらない俺を見て首を傾げるブラ子。可愛いなちくしょうめ

とりあえず、ボールを受け取ると地面に落としまたブラ子に向かって蹴る

「♪」

ブラ子は俺に持ってくるためにボールを拾おうとするがそうは問屋が卸さない

「ちょっと待てぃ！！」

「！？」

ビクッと反応するブラ子は泣きそうな顔してしまっている

「知っているか？サッカーではＧＫ以外が手を使ったら『ハンドリング』という反則になるんだぞ」

「ふえっ？」

「つまり渡す（パスする）ときは足でやれ」

「・・・・・・・・・・・・・」

ブラ子は恐る恐るボールを地面に置く。そしてゆっくりと足を振りかぶりボールを蹴った

「うしっ！ほら」

「ふえっ？」

俺はボールをブラ子に渡す。そんな行動に驚いた表情をするブラ子

まあ、こんな事をするのは初めてだから仕方なくはあるんだが

「ほらパスだパス」

「う、うん！」

「ナイスパス」

「あ、ありがとう・・・・・・」

俺とブラ子は、日が落ちるまでパス交換を続けた

「もう時間だな」

「うん……」

「おいおい。何でそんな顔すんだよ。また明日もあるんだからさ」

「えっ……？」

「んだよ？文句あるか？」

「な、ないよ！でも……迷惑じゃない？」

「全然。むしろ今日みたいにパスしてくれたら助かる」

「……」

ちょっと恥ずかしいのか下を向いてしまうブラ子。まあ、嘘は言ってないし

「それじゃあ、また明日な」

「う、うん！！また、明日！！」

ブラ子は元気良く挨拶してから帰っていった。まあ、最初より元気になったみたいで結果オーライだな

明日もブラ子が手伝ってくれるし一石二鳥……ん？

「そういえばあの子の名前なんて言ったっけ？」

名前をすっかり聞き忘れてた

「まあ、いいか」

第三話『そういえば、あの子の名前知らないなの』ｂｙなのは

さて、なんかいつの間にか一緒に練習（というより遊び？）をすることとなった俺とブラ子
今日も公園でサッカーの練習をしている

「ねえねえ」

「ん？」

「なんであなたはここでサッカーの練習をしているの？」

最近ではブラ子がよく喋るようになった。まあ、嫌ではないだ。むしろ、最初より明るくなってほっとしている

「特に理由はない」

「そうなんだ。それじゃあ、どうして一人で練習していたの？」

「友達がいないからだ」

「なんかさらっと重い言葉を言った気がするなの」

「気にするな。つか、俺からも質問があるんだが……」

「なんでこの前泣いてたんだ？」

「……」

おおっと、やっぱり聞いてはいけないことだったみたいだ。ブラ子が俯いてしまった

「あー……言いたくねえんなら別に……」

「ううん……言うよ……実は――――」

ブラ子の話によるとブラ子のお父さんが大怪我して入院してしまい、そのせいで両親が経営している『喫茶翠屋』が大忙し
だから、お母さんは一人で営業。お兄さんは何故か道場に剣術の修行。お姉さんはお店のお手伝い
家に帰っても誰もいない。ブラ子も手伝おうとはしたのだが、危ないからと追い出される。みんなが帰ってきても疲れ果ててすぐに眠ってしまうらしい

そんな疲れ果てている家族を見て『自分の我が儘でみんなをさらに疲れさせる訳にはいかない』と結論。だから、一人公園で遊んでいたらしい

「ふーん……お前の家も大変なんだな」

「うん……でも、私が我慢すればみんなが助かるから……」

「自分が泣くことになってもか？」

「うん……」

なんともまあ家族想いなブラ子なんだ

「でもまあ、今日ここでぐらいならそのストレスを発散しても良い

んじゃねえか？」

「えっ？」

「ほら。そのボールを思いっきり蹴っ飛ばせ。そうすれば少しはスッキリすんだろ」

俺はブラ子にボールを渡す。ブラ子は少し戸惑いを見せたが、両手を握りしめ覚悟を決める

「え、えええぇぃっ！！」

「おおっ！！」

ブラ子が蹴ったボールは勢いよく飛んでいく。相当たまっていたんだろう。ボールは軽く俺の頭上を越え後ろにある木へと一直線

「って、えっ？」

「あああっ！？」

がささっと、木の茂みへと入ってしまう。いやまあ、俺の頭上を越えていた時点でそうなるとは思っていたけどさ……

「……」

「……」

しばらくしてもボールが落ちてこない。どうやら木の枝に引っかかっちまったようだ

「うーんと……あっちゃあ……」

ありゃあ、木を蹴ったぐらいじゃ落ちてきそうなになさそうだ

「あ、う……」

「ん？」

げっ、振り向くと今にも泣きそうなブラ子

「あー、落ち着け。大丈夫だから」

「でも……でも……」

「明日、なんとかする。だから今日は帰るとしよう」

幸いそんな高い所に引っかかっている訳でもないし、確か家に梯子があるからそれを使ってボールを取ろう

「ごめんなさい！」

「いや別に謝らなくていいだろ。そもそもは蹴ろって言った俺が悪いし」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「あっ、おい！」

今にも泣きそうなブラ子はすごい勢いで走り去ってしまった

そんなに気にすることでもないんだが……

「まあ、いいか」

俺はそう言って家へと帰ることにした

◆◇◇◇◇◇◇◇◆

（どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう！？）

私の名前は高町なのは。私は今、頭の中がこれでもかと言うくらいに混乱していた

（私のせいで、あの人に迷惑をかけちゃった……嫌だよ。また一人になるのは嫌だよ……）

私はお父さんが怪我してからいつも一人だった。内気な性格の私には友達が少なく遊ぶことも満足にできなかった。だから、いつも近くの公園で遊んでいた。

そんなときに現れたのが、あの男の子だった。私より前から公園に行き来しているみたいだった

その男の子はいつも同じ時間で同じことをしていた。私でもある程

度知っているサッカーだった。しかも、やっていることはいつもリフティングだった

前にお父さんに連れて行ってもらった少年団のサッカーチームの練習を見に行ったことがあったんだけど、そこにいた男の子たちよりも上手ではなく下手だった

でも、毎日練習をしていたおかげで少しずつだったけど上達していた。私はそんな男の子を見ていて楽しかった。そして、そんな男の子を見るのが私の日常となっていた

それから男の子が失敗したボールを拾って持ってくるのも私の密かな楽しみになっていた。でもそんなとき――――

『ちょっと待てぃ！！』

『！？』

いつも通りボールを拾い持ってこようとしたら、いきなり男の子が大声で呼び止める。どうしよう……私、何か怒らせちゃったのかな……

『知っているか？サッカーではＧＫ以外が手を使ったら「ハンドリング」という反則になるんだぞ』

『ふえっ？』

『つまり渡す（パス）するときは足でやれ』

『……』

私は男の子の言われた通り足でボールを渡した

『うしっ！ほら』

『ふえっ？』

今度は男の子が私にボールを渡しました。どういうことかわからず変な声を出してしまう

『ほらパスだパス』

『う、うん！』

『ナイスパス』

『あ、ありがとう・・・・・・』

私と男の子は日が暮れるまでパス交換をした。そのとき私はここ最近で一番楽しい時を過ごしたと思う

『もう時間だな』

『うん・・・・・』

楽しい時間はすぐに過ぎ去るもの。残念だけど、男の子の気まぐれのおかげで楽しい時を過ごせて感謝するべきだと思う

『おいおい。何でそんな顔すんだよ。また明日もあるんだからさ』

『えっ……？』

『んだよ？文句あるか？』

『な、ないよ！でも……迷惑じゃない？』

『全然。むしろ今日みたいにパスしてくれたら助かる』

『……』

私はこのとき、とても嬉しかった。こんな私と遊んでくれる。必要としてくれている。それだけで私は嬉しかった

『それじゃあ、また明日な』

『う、うん！！また、明日！！』

私はこれまで明日が楽しみになったのはこれが初めてだった。そして、私と男の子との関係が始まった

それなのに――――

（あの男の子の大切なボールを木の枝に引っ掛けちゃうなんて……）

なんで大切なボールであるかわかるのかって？

それは、あのボールが唯一親から買ってもらったものだと聞き、そのボールはかなりボロボロで毎日使い大切にしていたのがよく感じとれたからだ

「このままじゃ私……またひとりぼっち……」

それだけは嫌だ！でもどうすれば……

◆◇◇◇◇◇◇◆

なんか帰る途中に靴ひもが切れて転んだ俺。こういうときって結構な確立で面倒なことが起きるんだよな

だから俺は家ではなく、公園に向かっていた。理由はなんとなく、って訳ではなくこれは家に帰ったら最悪なことが起きるぞと女神のお告げなのだろう

だから、とりあえず公園で時間を潰そうと考えたのだ

「だったらついでにボールを取ろうかな」

正直、この体であの木に登るのは大変だが、まあ、なんとかなるだろ。あっ、そういえば俺、高所恐怖症だった……

「まあ、なんとかなんだろ。ブラ子でもああして頑張っているんだし……」

えっ？

「あいつ何やってんだよ！？」

俺よりも背が小さいのに木に登ってもし落ちたら怪我しちまうだろが！
それにふらふらで今にも落ちそうじゃねえか

「ちっ」

柄にもなく焦っている俺は走ってブラ子の元へと向かった

◆◇◇◇◇◇◇◆

「うんしょ！うんしょ！うーんしょ！」

私は今、木を登っている。なぜならボールを取るため

あの男の子に許してもらうためには、あのボールを自分で取って渡せば許してもらえる

そう考えた私は一生懸命木に登ることを挑戦。でもそう簡単にはいかず、何度も何度も失敗したけどもうすぐ枝がある所までたどり着く

「うっ……」

つい下を向いてしまう。実際に見てしまうと、とても高い。でも、あの男の子に許してもらいたい。だから頑張るなの！

「あと……もう少し……」

枝にもう少しで手が届く。私は希望を胸にその枝に手を伸ばしたんだけど――――

「あっ……！？」

パキッと手を伸ばした逆側の手で掴んでいた木の皮が剥がれてしまう。もちろん私はその重力に逆らうことなどできる訳もなく、そのまま地面へと真っ逆さま

「っ！？」

やっぱり私はひとりぼっちなんだ。頑張っても報われないんだ

そう思っていたそのときだった

「コノヤロウ！！」

不意に声が聞こえ、向いてみると私の視線の先には、今まで見たことのない表情で走る男の子だった

◆◇◇◇◇◇◇◆

「あっ……！？」

「！？」

案の定というか手を滑らしたブラ子が頭から落下。小学生とかならともかく、幼稚園児、しかも女の子があそこから頭から落ちたら大変なことになりやがる

「コノヤロウ！！」

俺はいつの間にか走り出していた。俺ってこんな熱血キャラだったか？

まあ、どうでもいい。俺の目の前で怪我なんてされたら目覚めが悪い

「ぐっ……」

やばい、間に合わない。このままじゃブラ子が……

つーか、何で俺こんなに必死になってんだ？

そもそも、あいつがああなってんのは自業自得だろ？大丈夫って言ったのにボールを取ろうとしてさ

バカじゃね？ほっとけばよくね？

「うおおっ！！！！！」

なんて前世の俺だったらそう考えてたかもしれねえな

会って間もない俺のためにあんな頑張ってくれた女の子を助けずに諦めるなんてそんな最低なことできるか！

（頼む！間に合ってくれ！）

俺は全ての力を足に込めてジャンプした

「間に合えええええええぇぇぇぇぇぇっ！！！！！」

「間に……合った……」

「ふえっ！？」

俺の腕の中には目を見開き驚きの声をあげるブラ子

「おい、怪我はないか？」

「う、うん……イタッ……！」

って、おいおい。よく見たら手のひらが擦り傷だらけじゃねえか

「たく、無茶しやがって……」

「ひゃっ！？あ、あの……！？」

俺はとりあえずブラ子を抱き上げ、ベンチに座らせるとポケットに入れていたティッシュを水道の水で湿らせる

「ちょっと痛いが我慢しろよ」

「あうっ……」

湿らせたティッシュで手を綺麗にし、そのあとはハンカチでばい菌が入らないように巻きつける

「これは応急処置だから帰ったらちゃんと消毒しないとな」

「う、うん……」

「……」

「……」

なんともまあ重苦しい空気が流れていやがる

「あの……」

「あのよ……」

「……」

「……」

しまった。なんともまあお決まりなことをやらかしてんだよ

「お先にどうぞ」

「あ、うん……その、助けてくれてありがとう……あと、ごめんなさい！！」

「何で謝るんだよ」

「だってあなたの話を聞かずに勝手な……」

「ああ。そのこと？気にすんな」

「気にすんなって……」

「ブラ子が良かれと思ってやってくれたんだろ？むしろ、俺が謝罪を言うべきなんだろな。『俺のボールを取るためにあんな危険なことをさせてごめんなさい』ってな」

「そ、そんな！これは、自分のためでもあって……って『ブラ子』！？」

おっと、つい密かに呼んでいた愛称を言ってしまった

「それで、『自分のためでも』とはどういうことかな？」

「それは――――」

ブラ子の話によると、ブラ子は俺が自分のことを嫌いになって遊んでくれなくなること、一人になることが怖かった

だから、俺の機嫌を直そうと自分でボールを取ろうとした

「だからといって、もっと方法はあっただろうに……」

「それは、無我夢中で……」

「そうか。まあ、ボールは家から梯子を持ってきてそれで取る。そっちの方が安全だ」

「そっか……それじゃあ、私は邪魔だね。明日は公園には……」

「おい待て。なに勝手なことをほざいてやがる。お前も手伝うんだよ」

「ふえっ？」

「お前、俺が一人で梯子を運んだり、木に立てかけたりできる訳ねえじゃねえか。それに登っているとき誰かに支えてもらわなきゃ危ないじゃんかよ」

「私も一緒に居ていいの？」

「んだよ？嫌なのか？」

「そうじゃないけど……怒ってないの？」

「誰がそんなこと言ったんだよ。むしろ、手伝わないことに怒るぞ」

「でも、でも……」

「でももかかしもねえよ。お前は少しその深く考えすぎる性格をどうにかしろ」

「そんなこと言われても……あっ！？」

いきなり大声を出すブラ子。一体どうしたんだ？

「あなたも怪我をしているなの！！」

「あっ、本当だ」

どうやらブラ子を受け止めた時に擦りむいたようだ。両肘両膝

「なんでそんなに軽いの！？痛くないの！？」

「まあ、細かいことは気にすんな。つか、お前に一つ聞きたいことがあるんだ」

「細かくないと思うけど、なに？」

「お前の名前はなんて言うんだ？」

こうして俺はブラ子こと『高町なのは』の名前を初めて知った

まあ、今まで名前を聞いてこなかった方がおかしいと思うのだが……まあ、細かいことは気にすんな

第三話『そういえば、あの子の名前知らないなの』ｂｙなのは（後書き）

書いといてなんですが、擦り傷の治療って消毒はだめらしい

第四話『友達が出来たのは嬉しいが強引なのは如何なものだろうか』by潤一

前回、ようやくブラ子の名前を聞いた俺。後は帰って飯食って寝るだけだと思っていたんだが……

「さて、ブラ子。これはどういうことだ？」

「『ブラ子』じゃないなの！『なのは』なの！」

ぷんぷんと頬を膨らませるブラ子こと高町なのは。どうやらブラ子という愛称は気に入らないようだ

「わかったわかった。高町、どうして俺がここにいるか説明してもらおうか？」

「む～、私と潤一くんが怪我したから私の家で治療しようと……」

「高町、お前のその優しさは大したものだ。俺もそんな優しさに涙が溢れてくる」

「そ、そうかな。えへへっ♪」

嬉しそうに微笑む高町。うん、お前は本当に優しいヤツだ

「だが、断る！俺は自分の家で治療する！」

「そんなこと言わずにほらっ！」

ぐっ！あんな細腕でなんて力なんだ！
俺は結局、高町の家で怪我を治療することにした

「ただいま」

「おじゃまします・・・・・・」

高町の家に入って最初の感想は、ただ広いって感じだな。道場があるって言ってたし、お店は意外と儲けてんのかな？
それともう一つ気になることがあったりする

「誰も居ない・・・・・・」

今の時間は１９時前。普通ならお母さんが出迎えたり、夕飯を作っていてもおかしくない
だが、ここはそれどころか明かりすらついていなかった

「ううん・・・・・・ここにお兄ちゃんの鞄があるから・・・・・・」

「道場で剣術の修業だっけか？」

「うん・・・・・・」

こくりと頷く高町は少し悲しそうな顔をしている。いつもこいつは帰ったらこんな寂しい思いをしていたのか・・・・・・

「えっと・・・・・・確か救急箱は道場の中にあったから取ってくるよ」

「いや、俺も行くよ。そっちの方が手っ取り早い」

「そうだね。それじゃあ、付いてきて」
俺と高町は奥にある道場へと向かうのであった
「おっ？明かりがついてんな」
「お兄ちゃんがの邪魔にならないように静かに入るなの」
高町がゆっくりと扉を開ける
「！！　誰だ！」
「ふえっ！？」
少し扉を開けて顔を出しただけなのに凄い声で威嚇する男の人の声
「なんだ。なのはか……」
「た、ただいま……お兄ちゃん……」
「ああ。どうしたんだ？夕飯なら扉の前に置いといてくれと言っているんだが」
なんともまあ、顔は見えないがかなり棘のある喋り方だ。練習の邪魔をされたことにイライラしているのだろうか
「ううん。ちょっと救急箱を取りに……」
「救急箱？　……！？」

バンッと扉が勢いよく開かれる。そこには俺と高町より遥かに大きい。こいつが高町兄か、恐らく中学生くらいかと思う

「どうしたんだ、なのは！その怪我は！？」

「えっと、これは……その木登りしていたら……」

「なんで木登りなんか……ん！！」

高町兄の鋭い目が俺に向けられる。なんか嫌な予感しかしねえんだけど……

「お前が無理矢理やらせたんだな……」

「はい……？」

「お前が嫌がるなのはを無理矢理木登りさせたんだな！！」

嫌な予感的中！高町兄の殺気みたいなものが俺に向けられているのがよくわかる。つか、それ完全な思い込みですから！

「ち、違うよお兄ちゃん！これはなのはが――――」

「道場に入れ！貴様のその腐った根性を叩き直してやる！」

「えっ、ちょっと！？」

「潤一くん！？」

高町兄に手首を掴まれ、幼稚園児の身体である俺が抵抗できる訳もなく道場に連れ込まれた

◆◇◇◇◇◇◇◇◆

「メエェェェンッ！！」

バシンッ！と竹刀の音が鳴り響く。なんでこうなってしまったんだろう？

どうして、潤一くんがお兄ちゃんと試合をしなきゃいけないの？

潤一くんがお兄ちゃんに勝てる訳がない。ただ一方的にやられるしかない

「さあ、まだ終わりじゃないぞ！立て！」

「ぐっ……」

ふらふらと立ち上がる潤一くん。それもそうだ。かれこれ一時間もお兄ちゃんに竹刀を叩き込まれているんだもの

一応、防具は付けているけど、それでもある程度の衝撃はある。それを長時間受けていたら潤一くんが……

「止めて、お兄ちゃん！潤一くんはなにも悪くないなの！」

「黙ってろ！こいつには、なのはが受けた傷の倍いや、二度となのはに近づけないように叩きつける必要があるのだからな！」

「そんな……」

止めたくてもお兄ちゃんが怖くて動けない。どうしよう、潤一くんはなにも悪くないのに……

「オラオラオラッ！！」

「ぐっ！がっ！いっ！」

めったうちです。潤一くんは竹刀を持っているので精一杯なのか全く動けません。このままじゃ潤一くんが……

「止めて、お兄ちゃん！！」

「なのは！？なにをする！離せ！！」

もうこれ以上見てられない。私はお兄ちゃんの恐怖より潤一くんを助けたい気持ちの方が上回り、お兄ちゃんの足にしがみついた

「離さない！潤一くんはなにも悪くない！！」

さっきは潤一くんが身体を張って助けてくれた。今度は私が潤一くんを助けるなの！

「いい加減にしろ！」

「きゃっ！？」

私はお兄ちゃんの腕力には勝てず、振り払われてしまう。でも諦めない！私は潤一くんを守るんだ！

「ぐっ！何でだ、なのは！？俺はお前の、家族のために――――」

「それは……本当に家族のため……なのか？」

「なにっ！？」

私とお兄ちゃんが見た先にはお面を取り投げ捨てた潤一くんがいた

◆◇◇◇◇◇◇◇◇◆

「あんたの……そのやっていることは……本当に家族のため……なのか？」

あー、くそ。打たれすぎたせいか意識が朦朧としてやがるな

「どういう意味だ……」

でも、あの分からず屋に物申さないと気がすまない

「あんたの妹……なのはから話を聞いた……お父さんが入

院して……みんなが忙しいって」

「ああ……」

「それなのに……あんたはここで修業か……？修業（それ）が家族のためになる……本当に……そう思っているのか？」

「……黙れ……」

なんか呟いているけど知ったことか。俺は俺の言いたいことを言ってやる

「それは、ただの自己満足じゃないのか？」

「黙れ……」

「それは、ただの……『逃げ』なんじゃないのか？」

「黙れって言ってんだろうがあああああああああ！！！！」

「きゃっ！？」

高町兄は、なのはを振り払い竹刀を上段に構えながら突っ込んでくる

ああ、残念ながら今俺に抵抗する力はない

スパーンッ！と気持ちの良い音が道場中に鳴り響いた
とてつもなく痛い。身体の芯まで衝撃が入る
もう、このまま倒れてしまいそうだ

だけど・・・・・・・！

「なっ！？くっ！？」

俺は高町兄の竹刀を握りしめる
俺に掴まれた竹刀を必死に引っ張るが、絶対に離さない。まだ、高町兄に言いたいことがあるんだからな

「俺は別に・・・・・・あんたのやることを・・・・・・・全否定するつもりはない・・・・・・・家族のためという気持ちは・・・・・・・本気だってことはわかる・・・・・・・でも、もっと家族のためになることが・・・・・・・あるんじゃねえのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「お店を手伝ったり、お父さんのお見舞いに行ったり……それができないのであれば……せめて……」

これが、俺が一番言いたかった言葉

「せめて……なのはと一緒に遊んであげてくれよ……」

「お前……何でそこまでボロボロになってまで……」

何で？決まってんじゃねえか

「なのはは……俺の友達だからだ」

友達のために身体を張るのは当然だろ？

「潤一くん！！」

なのはの言葉を最後に俺は意識を失った

第五話『人ってちゃんと話さないと本心がわからないものだな』ｂｙ潤一

前回、高町兄にしこたまなぶられた俺。自然というより痛みで起きた俺はとりあえず一言

「知らない天井だ……」

うん。誰でも一回はしたくなるネタだよね

「良かった。目が覚めたのね」

「……あなたは？」

「私は高町桃子。なのはの母よ」

おおう！まさかの母！とてもじゃないが、子持ちには見えない容姿だ

「えっと、俺は――――」

「潤一くんよね。なのはから話は聞いてるわ……恭也が酷いことしちゃって本当にごめんなさい」

子供相手に深々と頭を下げる高町母

「い、いや大丈夫ですよ。傷だってそんなに――――イテテッ！？」

「痛くないはずないわ。１０も離れた人の竹刀を防具なしに喰らってしまったのだから」

「そ、そうでした……」
今、よくよく考えてみれば本当にバカなことしたもんだ。後悔はしてないけど
「一応、ご飯を作ってきたのだけど食べられるかしら？」
「あ、はい。ありがとう――――」
「すぅすぅ……」
「……ん？」
なんかどこからか寝息が聞こえた。聞こえたのはちょうど高町母の反対方向
「なのは……？」
「ムニャムニャ」
何故、なのはがこんな所で？
そう思ってたら高町母がふふふと微笑んだ
「なのはったら潤一くんが起きるまで絶対に離れないって聞かなくて」
「そうなんですか……」
なんともまあ、嬉しいことをしてくれる。出来ればこのまま寝かしといてやりたいが

「起きろ」

「ふにゃ！？」

ビシッとなのはのおでこにデコピンを喰らわした。いきなりのことで混乱するなのはだが、少しすると俺のことに気づいたのか驚きから歓喜の表情へと変わる

「潤一くん！良かった、起きたんだね！」

「ああ、おかげさまでな」

「なのは、今から潤一くんにご飯を出すのだけれど。なのはも食べる？」

「うん！食べる！」

元気良く返事するなのは。つか、今何時だろうか？

「って、朝の九時！？」

「うん。潤一くん、倒れてからまったく起きなかったんだよ。お家の人に連絡しようとしたのだけど潤一くんの家の連絡先がわからなかったからできてないんだけど、大丈夫かな？」

「いやまあ、大丈夫だろ。両親ともに働いてて帰ってくるの遅いし、最近は帰ってこないなんてざらだ」

「そうなんだ……寂しくないの？」

「そこそこな。でもまあ、これからは大丈夫だろ」

「えっ？」

「だって、『友達』が出来たんだからさ」

俺の目の前に、ちょっとおっちょこちょいの友達がな

「……うん♪」

「あらあら、いい雰囲気ね♪」

高町母が朝食を持ってやってきた。つか、そのセリフは幼稚園児に言うもんじゃねえよ

「はい。これを食べて元気になってね」

「ありがとうございます。それじゃ、いただきます」

「いただきま――――」

俺となのはが朝食を食べようとしたとき、ピンポーンとチャイムがなった。気にせず食べようとしたのだが、ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン！とチャイムの連打

「はいはーい！今、出まーす」

「誰だろうね？」

「さあ？」

俺も少し気になったので耳を傾ける

『あのどちら様でしょうか？』

『退きなさい！ここにいるのはわかっているの！』

『えっ？あっ、ちょっと！？』

うーん、どっかで聞いたことがあるような声だったな。つか、ドドドッ！と凄い足音が凄い勢いでこちらに向かって来ているのがわかった

「じゅんちゃん！！」

「ふえっ！？」

バタンとドアをこじ開けて入ってたのは女の人。そして、俺を見つけるなり――――

「じゅんちゃ～～～ん！！」

俺に抱きついてきた。……はっ？

「良かった！家に帰ってもじゅんちゃんが居なかったからとても心配したんだから！」

「ちょっ！苦しい！」

「潤一くん……この人は……？」

「あー……一応、俺の母さん」

「ええっ！？」

驚愕するのはだが、驚きたいのはこっちの方だ

「はっ！じゅんちゃん！その怪我はどうしたの！？まさか……ここの人たちに虐められて……」

「いや、違う……から……」

断言できないのが残念だが、そんなことより驚きなのは、母さんだ俺の母さんって、こんな性格だったか？いつも、ご飯だけは作って深夜までは帰ってこなかいし、会ってもただ微笑んでくるだけであんな感じのテンションになったことなど一度もない

「大丈夫よ、じゅんちゃん。ここの人は私がボコボコに――――」

「人の話を聞け」

「あふんっ！？」

俺はとりあえず手元にあった本の角で母さんの頭部にぶつけ沈静化させた

俺の母さんってこんなキャラだったか？

「本当に申し訳ありませんでした！」

土下座して謝るのは、当然俺の母さん。まあ、俺がさせたのだが

「そんな！？頭を上げて下さい！実際に怪我をさせてしまったのはこちらですし」

「いえいえ、頭に血が上っていたとはいえあんな行動……本当にお恥ずかしい所をお見せしてしまって」

ぺこぺこと頭を下げる二人

「つか、母さん。どうやって俺がここにいるってわかったんだ？」

「ふふっ。母の力は偉大ってことよ」

「いや、答えになってないから」

「潤一くんのお母さんもどうですか？一緒に朝ご飯でも」

「本当ですか？実は朝、じゅんちゃんが居ないことに気づいて家を飛び出しちゃったから何も食べていなくて。是非お願いします」

俺となのは、高町母、母さんの四人で朝ご飯を食べることになった。
正直楽しかった
親と一緒に食べるのは久しぶりだし、友達とこうして食事したのも
初めてだったからだ

「なあ、母さん」

「何かしら、じゅんちゃん？」

朝ご飯を食べ終えた後、俺と母さんは一緒に家へと帰り途中。俺は
気になることがあったので聞いてみることにした

「なんて言うか……いつもの母さんとは様子が違うというか……
……いつもは俺を避けているっていうか」

「それはね……理由があるのよ。私もお父さんも……」

「父さんも？」

いきなり深刻な顔になる母さん。なんだ、それほど重苦しい理由な
のか？

「そう……私とお父さんは……ものすっ――――ごく！じゅんちゃんが好きだからよ！」

「はい？」

俺のことが好きだから？予想外な理由に呆けてしまう。そして母さんがおもむろに携帯を取り出したかと思うと画面を見せてくる

「これって俺？」

「そうよ。これはあなたが三歳のときの写真よ。お父さんも同じ写真を待ち受けにしているわ」

マジか……ずっとどうでもいい存在だと思っていたのだが……

「でも、なんでいつもあんな行動を？」

「それは……」

「？」

「じゅんちゃ～～～ん！！」

母さんがまた抱き付いてきたかと思ったら凄い勢いで頬擦りをしてきた

「つか、痛い！頬擦りしすぎだから！熱い！摩擦熱でとても熱いから！！」

「はぁ、はぁ……ごめんなさい。つい……」

いや、ついで頬を火傷されたら困るんだが……

「ちなみにお父さんはつい抱き上げて振り回しちゃうの。じゅんちゃんは覚えてないみたいだけど、一回やったら手を滑らして落としてしまっていたから控えているのよ」

「そういえば1日だけ記憶がない日があったような……」

まさか父さんが原因だったとは

「じゅんちゃんは他の子供とは違って大人びているじゃない？だから、過剰な愛情表現は嫌われちゃうんじゃないかと思ったの……」

そうだったのか……まさか原因が俺の性格だったとは。まあ、薄々感づいていたが

「でも、それはじゅんちゃんを寂しい思いをさせてしまってたみたい。ごめんね。不甲斐ない親で」

「そんなことないよ！母さんも父さんも俺のためを思ってしてくれたことなんでしょ？そんな母さんと父さんが不甲斐ない訳ないじゃないか！」

「じゅんちゃん……」

「だから、これからは普段の母さん父さんでいてよ。そっちの方が俺は嬉しいから」

「じゅんちゃん……じゅんちゃ～～～ん！！」

うおっ！？また、母さんが抱き付いてきた。そんなに嬉しかったのだろうか

「じゅんちゃんは本当に良い子だ～～～！！もう連れ去りたい！お家に連れ去りたい！！」

「いや、俺、あなたの息子だからね！？つか、熱！摩擦熱がぁぁぁ！！？？」

改めて俺は家族の温かさを学んだ。それも前世では比べものにならないほどに

まあ、帰った後の父さんからの愛情表現は止めてもらいたいがな

翌日、俺はなのはが引っかけたボールを取るために公園に来た

「あっ！潤一くん！」

そこには元気良く声をかけてくるなのは。そしてもう一人意外な人物がいた

「……」

そこには俺をボコボコにした高町兄がいた

「ども」

「ああ……」

とりあえず挨拶したが、高町兄もはっきりしない挨拶を返す

まあ、気持ちはわかるが

「もう、お兄ちゃん！今日は潤一くんに言いたいことがあるから付いてきたんでしょ？早く言いなよ！」

「うっ……ああ……」

なのはに言われて高町兄はこちらを向き、そして頭を下げた

「この前は本当にすまなかった。イラついていたとはいえあんなことをしてしまって……」

「ああ～……いいっすよ別に俺は気にしてないっすから」

「しかし……」

「いいっすって。本人がそう言ってんだから。気にしすぎるとハゲるっすよ」

「……ああ。でも、これだけ言わせて欲しい。君のおかげで目

が覚めた。俺は父さんが入院してしまって、自分がどうにかしないと思い考えたあげくが剣術(あれ)だった。だが、それは間違いであったことに気づかせてくれた。本当にありがとう」

「いや、俺はただやりたいことをやっただけっすから」

「そうだったな……俺の名前は高町恭也。よろしくな」

「俺は上條潤一。昨日の敵は今日の友。よろしくっす、恭也さん」

俺は恭也さんと握手する。これで友達がもう一人増えた

「むぅー……ねえ、潤一くん。ボールを取るんでしょ？早く行こう！」

「わ、わかったから引っ張るなって！恭也さんも手伝ってくださいよ」

「ああ。もちろんだ」

今日は俺となのは、恭也さんの三人で楽しい時間を過ごした

でも、内心では悲しい気持ちでいっぱいだったことをなのはと恭也さんは気づかなかった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0131ba/

魔法少女リリカルなのは　とある転生物語

2012年1月6日11時48分発行